春秋彩

Syunjusai

特集
総合管理学部20周年を迎えて …… 2

活躍する卒業生 …… 7
国際交流 …… 8
研究活動紹介 …… 10
大学の動き …… 12
後援会便り …… 13
活き活き元気種 …… 14
熊本県立大学未来基金寄付者ご芳名 …… 15
人事情報 …… 15
おすすめの１冊 …… 15

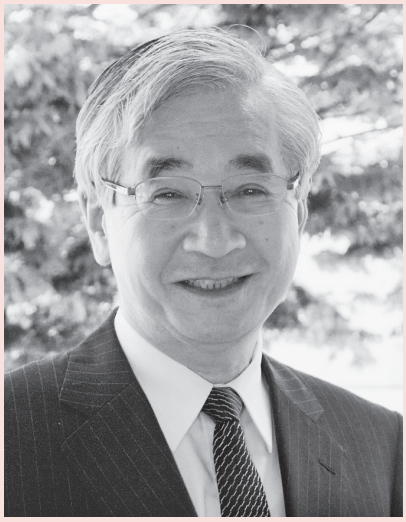
熊本県立大学環境共生学部西棟の北側より撮影した桜(仙台八重枝垂れ)

熊本県立大学広報誌
2015 SPRING
vol.42

熊本県立大学

春秋彩とは　万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。

あいさつ



学長
古賀 実

従来の法学、経済学、経営学といった社会科学の学問分野を融合し、幅広い視野を持ち、同時に高い専門性を追求する人材の育成を目指す総合管理学部が設立され20年が経過しました。この間、社会に送り出した卒業生は2015年3月で5,000名を超えました。総合管理学部が目指す人材、すなわち企業経営の視点を備えつつ政府・自治体で活躍する人材、公共性やリーガルマインドを備えた企業人、情報通信技術や情報管理を学び情報管理部門で活躍する人材は着実に育成され、卒業生の多くが様々な分野で活躍し、地域社会のリーダーとして重要な役割を担ってきています。また、総合管理学部の創設は男女共学化という本学の新たな出発となり、生活科学部から環境共生学部への改組、全学的な大学院博士課程の整備など、時代の要請に応え得る大学として本学の改革の原動力になってきました。

地域社会の創造拠点として大学の存在が大きく期待されています。総合管理学部をはじめ、本学はこれまでの実績をさらに発展させ、地域社会を担う人材の育成に努めて参ります。皆様のご支援宜しくお願いします。

特集 総合管

「総合知」の地平

総合管理学部長　黄 在南

1994年4月、熊本女子大学の崇高な精神を継承しながら、大学の名を変え、新たに熊本県立大学の名のもと共学化と総合管理学部がスタートしました。今からほぼ20年前に、既に時代の流れの行方を見据えた本学の先学たちの賢慮な判断により、社会科学の分野を総合管理という新しい時代の精神から脱構築し、新しい学部の教育・研究・大学運営・社会貢献の礎とするという大胆かつ壮大な構想がスタートしたわけです。

いま振り返ると、学部創設の際、当時馴染みの薄かった「総合管理」という学部名を敢えて考案し、世の審判を問おうとした先学たちの勇気ある挑戦に込められた、実践的かつ学問的な深い洞察力に対し、改めて敬意を表せざるをえません。我々の生活に密着した様々な公共機関、企業等に求められている、公共及び経営マインドの総合的融合が持つ今日的な意義をいち早く見出すとともに、普遍的な創造マインドの作法を築き上げたのです。

この20年間、総合管理学部は、地域社会に根付いた学部として、様々な地域課題に係る研究に邁進するとともに、その成果に基づく実践的な教育を提供してきました。我が熊本県立大学の学生は、素直な心を持ち、ものごとに真摯に取り組む者が多いと思います。このような学生たちの持つ能力を広範なカリキュラムと充実したゼミ教育により、大きく伸ばす仕組みを持っているのが総合管理学部の特長です。

理学部20周年を迎えて

これまで総合管理学部は、「企業経営の視点を備えつつ、政府・自治体で活躍する人材」、「公共性やリーガルマインドを備えた企業の人材」、「情報通信技術や情報管理のあり方などを学び情報部門などで活躍する人材」、「地域社会や福祉の分野で実践的に活躍する人材」を社会に送り出してきました。総合管理学部で学んだ学生たちは、幅広い視野を持ちながら、同時に高い専門性を追求することができる人材として、熊本県内をはじめ、日本全国、さらには全世界で活躍しています。特定の職種に縛られることなく、社会のあらゆる分野において活躍することができ、さらに情報交換しながら互いに助けあうネットワークを構築できることこそ、我が総合管理学部における学びの最も優れた点の一つです。

この20年、社会環境もまた大きな変動を重ねてきました。少子高齢化やグローバル化、情報化の急速な進展に伴い、地域社会の抱える課題もますます複雑・多様化しています。経済の状況も不振が続き、ついに「失われた20年」と呼ばれるに至りましたが、その中でも特に大きな衝撃を与えたのが2008年に起こったリーマンショックです。米国の投資銀行の破綻が引き金となった世界的な金融危機により、多くの人々が苦しむこととなりました。この問題は、一部の人間が私利私欲を追求した結果としての倫理観の欠如が原因となっていると言われています。かかる倫理観の欠如は、当事者たちが自分達だけの営利追求という歪められた経営マインドに目を向け、公共性やリーガルマインドに思い至らなかったということ、即ち総合管理的な視点が欠けていたことがもたらしたものだと言っても過言ではありません。本来、人間の幸福とは、単なる私利私欲の追求ではなく、周りの人々をも幸せにすることで初めて得られるものです。それを実現することこそが、総合管理学部が掲げる総合管理が最終的に目指すものなのです。

人と人とをうまく協力させ、社会的諸果題を解決していくことができる能力を身につけた人材はあらゆる場面においてリーダーシップを発揮することができます。その意味で、総合管理学部の使命は「リーダーシップを発揮して人々を幸せにする人材を育てること」だと理解することもできます。この使命は壮大かつ永遠な課題ですが、実現可能なものです。

【総合管理学部20年の歩み】

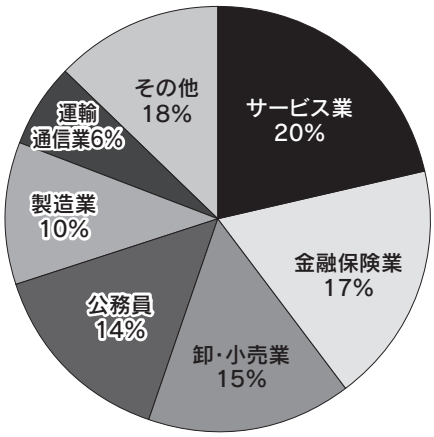
平成6年度	男女共学化した新生「熊本県立大学」および同総合管理学部総合管理学科の発足
平成9年度	総合管理学部第1期生が卒業
平成10年度	熊本県立大学大学院アドミニストレーション研究科（修士課程）設置
平成12年度	大学院アドミニストレーション研究科博士（後期）課程設置
平成15年度	・4コース（パブリック・アドミニストレーションコース、ビジネス・アドミニストレーションコース、情報システムコース、地域ネットワークコース）を導入した新カリキュラムの開始 ・自己推薦型（AO）入試の開始
平成16年度	熊本県立大学総合管理学部創立10周年記念論文集『新千年紀のパラダイム－アドミニストレーション－』の刊行
平成20年度	既存のコースを発展させた4コース（パブリック・アドミニストレーションコース、ビジネス・アドミニストレーションコース、情報管理コース、地域・福祉ネットワークコース）による新カリキュラムの開始
平成26年度	・総合管理学部20周年記念論文集「総合知の地平」の刊行 ・共学化・総合管理学部設立20周年記念シンポジウムの開催

【総合管理学部データ】

総卒業生数（平成9年度～平成25年度合計）	4,791人
就職率（平成9年度～平成25年度平均）	87.1％
県内就職の割合（平成9年度～平成25年度平均）	65.3％

【主な就職先（平成9年度～平成25年度）】

サービス業	743人
金融保険業	629人
卸・小売業	537人
公務員	508人
製造業	373人
運輸・通信業	223人
その他	432人



特集記事

総合管理学部生・卒業生座談会

総合管理学部設立20周年を迎えて、津曲副学長コーディネートのもと、総合管理学部の現役学生とその卒業生に“総管”のことについてアツく語っていただきました。

【座談会メンバー】
○津曲 隆副学長(総合管理学部教授、コーディネーター)
○今別府 隆宏さん(熊本県人事委員会事務局総務課、第49回生)
○齊藤 翠さん(肥後銀行総合企画部文化・広報室、第54回生)
○上田 桃子さん(総合管理学部4年生)
○錦戸 大輝さん(総合管理学部1年生)

START! discussion

津曲副学長(以下「津」):皆さんお忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。このたびは、総合管理学部が昨年設立20周年を迎えまして、改めて「総合管理学部」について、お集まりの皆さんが各々で持っている「総管」にまつわる「エピソード」や「想い」について、ざっくばらんに語っていただきたいと思ってます。それではまず自己紹介から。

今別府隆宏さん(以下「今」):みなさんこんにちは。県職員として現在職員の採用の仕事をしている今別府です。僕は、平成12年度卒業の37歳です。女子大から男女共学の県立大になって4年目の年に入学しました。

齊藤翠さん(以下「齊」):肥後銀行に勤務してます齊藤です。私は、平成17年度卒業です。銀行では支店の窓口などを経て、現在本部の文化・広報室というところで、約2千人の行員向け広報誌の担当をしております。今は育児休業中です。

今別府 隆宏さん

上田桃子さん(以下「上」):総合管理学部4年の上田です。4月からJA共済連に就職が決まり、先日卒論ができあがったところです。卒業まであと少しですが最後まで学生生活を楽しみたいと思います。

錦戸大輝さん(以下「錦」):総合管理学部1年の錦戸です。まだ入学して9ヵ月と、現在「総合管理学部とは何ぞや」を学んでるところです。授業の外にもKUMAJECT(球磨地域の活性化を支援する課外活動)にも参加してます。

津:錦戸君は19歳？ということは、生まれた時には既に総管があったということだね。ちょっとしたカルチャーショックだなー。

「総管」ってひと言でいうと？

津:今では、ある程度地域活動などにより認知度のある総合管理学部ですが、創設期の今別府さんの時は、周囲の人に「総合管理」って何？って訊かれたことがあるんじゃないですか？そのとき何て答えてました？

今:「経営」と「行政」の一元化や「哲学」と「実学」の融合など、個別化・細分化した学問領域を統合するアプローチを学ぶのが総合管理学部だと当時教わりましたので、周囲にはそのように答えてましたね。

津:何か困ったこととかは？

今:履歴書に「総合管理学部総合管理学科」と記入するのが大変で(笑)。字数が多いので他の大学の人とそこで差がつくというか(笑)。まあこれも「総管あるある」ですかね。

一同:(笑い)

津:齊藤さんはどうですか？

齊:とにかく色んなことを幅広く学ぶところ、って面接の時に言ってましたね。銀行員は色々な職種の方とお会いするので、どんな方々とも話を合わせられる「コミュニケーション力」を身につけられる場所だと思います。

津:そういえば、肥後銀行には総管の卒業生が結構いるんですよね。

齊:若手中心ですが徐々に集まってきています。年に数回県立大学の同窓会があるんですが、毎回40人程集まってます。

津:そうやって、だんだん総管のイメージが定着していくんでしょうね。

今:職場では、学部よりも県大全体として「真面目で大人しい」というイメージを持つ方が多いかも知れません。肥後銀行ではどうですか？

齊:いい意味でうちでもありますね。ちゃんと勉強してきたんだろうなーって。

齊藤 翠さん

上:私も齊藤さんと同じで、「行政」、「経済」、「情報」、「福祉」の4つの視点から多面的に物事を学んだって面接で言いました。

津:そういう模範解答を言ってたんだ(笑)。

上:(笑)。ただ、多面的に何でも取り込めばいいってモンじゃなく、色んなジャンルがある中で、自分の強みを活かせる一番のものを自分で選べる学部…卒論を書いてて、最近そういう結論にようやく辿り着いた気がします。

津:錦戸君はどうだった？入る前と入った後で。

上田 桃子さん

錦:僕の場合、きっかけは、高校の頃にSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)で音の研究をしてて、その時に知り合った先生がたまたま総管の先生だったのでそこに行こうと。ここに来てからの印象は、「色んなことが学べて大学に入ってから自分を作り上げていく」ということですね。専門の学部は、特定の分野を突き詰めていくと思うんですが、逆にここでは、入ってから自分のやりたいことの選択肢を広げて、4年間でそれを…えーと…

今:ただ広げるだけではなく自分の興味を媒介させて統合していくというイメージかな？すごいなぁ、最近の学生さんはしっかりし

てる(笑)。

津:将来どういうことがやりたいの?

錦:自分も音楽をやってるし、やはり音に携わる仕事がしたいですね。ただ、大学に来て改めて色んな選択肢がまだ自分に残されているんだと分かって、これから卒業するまでに色々変ってくるんじゃないかって思ってます。

錦戸 大輝さん

津:僕の場合は、約20年前に総管の情報の教員の公募があって、ご縁があって熊本にやってきました。そのころ総管にやって来る教員は、みな分野がばらばらで、「総合管理」って何だ?から始まって(笑)。それで、例えば情報の教員とかでしょっちゅう飲みに行ってましたね(笑)。そこで誰も経験したことのない総管の情報教育について、日夜侃々諤々(かんかんがくがく)の議論をしてました。

津:紆余曲折を経て現在に至ってますが、20年経っていま改めて「総合管理学部のあり方」について検討を行っています。

津曲 隆副学長

卒業生は今の「総管」をどう見てる?

津:卒業生の皆さんは今の総管をどういう風に見てますか?

今:そうですね。地域の課題解決への取組みなどで大きな存在感を感じています。関連するニュース映像が流れると、つい見入ってしまいますね。

齊:私は広報にいるので毎日新聞5紙を見るんですが、地域活動を行っている県大の記事が結構出てきますので、卒業生としては嬉しいですね。

津:確かにさっき錦戸君が言ってたKUMAJECTなんかは、もう歴史を感じるほど長くやってますね。授業内外でのそうした活動が新聞などに結構取り上げてもらってるんですよね。

「総管生」でよかったこととは?

津:皆さんにお尋ねしますが、自分が「総管生」で良かった、と思うところはありますか?

上:総管って、常に何かを作り上げていく面白さがあるところですかね。何か決まりがあるんじゃなく、結局4年間で、受身で聞いているよりも、「まず自分で考えてごらん」という課題の方が多かった気がします。高校の頃「大学はひたすら知識を詰め込むところ」だと思ってたので、大学4年間で自ら課題を考えて取り組むことを学んで、これからもずっとそうやっていくんだって思うと、ここに来て絶対に良かったと思います。

今:社会人に不可欠な要素を一つ挙げるとしたら、やはり「好奇心」だと思うんですよね。じゃあ自分がそれをどこで培ったかというと総管だと。マネジメントを学んで、サークル運営で実践してみたり国際関係の授業に刺激されて留学生のホストファミリーになったり、座学だけでは終われない興味深い授業がたくさんありました。先生との距離も近く「大きすぎず小さすぎない規模の学部」というのも良かったですね。

津:そういえば今別府さんって僕も学生の頃から知ってますが、何処にでも出入りしてた。ほんとに顔が広くて(笑)。大学を巻き込んでよくイベントとかやってたなあ。

齊:私はマスコミ志望で大学に入ったのですが、その影響で3年生の時に「大学案内2005」のパンフレットづくりに参加させてもらいました。結局銀行という別世界に入ったのですが、現在は広報業務を担っており、当時のことがしっかり役に立ってます(当時のパンフレットをみんなで見る)。

一同:おーっ!!かっこいいーっ!!

津:なんか皆さんのお話を聞いていると、総管って「何かを作り上げる学部」だなって思えてきたなあ。

錦:数少ない経験なんですが(笑)、総管はフィールドワークに参加する機会が多いと思います。授業では主に「成功」を学び、フィールドワークでは主に「失敗」を学びます。どちらも大事で大変ですが、両方をバランス良く学べる学部だと思います。

「総合管理学部生」に求めるもの、「総合管理学部」に期待すること

津:それでは最後に、今後「総合管理学部生」に求めることについて、社会人であるOB、OGから、それぞれメッセージをお願いします。

今:大学が「何かしてくれる」といった受け身ではなく、自分の興味関心を深めるために学部や大学を利用し尽くすぐらいの「積極性」が必要だと思います。そのうえで、様々なチャレンジを経験してもらいたいです。

齊:何でもできる総管だからこそ、その引き出しを活かして円滑にコミュニケーションがとれることは強みだし、社会人として大事なスキルだと思っています。皆さんはその県大の伝統を活かしつつ、「真面目で大人しい」といわれる県大のイメージを良い意味で壊してドンドン前に出て行って欲しいと思います。

津:続いて卒業間近の上田さんから、今後の総合管理学部に期待することをお願いします。

上:何でもできる総管だからこそ、型にはまらず常に変化していって欲しいと思います。「総管は次に何をするんだろう?」って注目されますから。

津:ということは、公務員になる人材には向かないかな(笑)。

今:大丈夫です。公務員にも向いてます(笑)。確かに、公務員志望の学生さんに「なんで公務員になりたいの?」と聞くと、多くの方が待遇面で「安定してるから」と答えます。でも、一番の安定は「変化に強いこと」ではないでしょうか。私がそう思うというよりは、学生時代に経営学の授業で学んだことの受け売りですが(笑)。変化を恐れずに、チャレンジし続ける姿勢は、今の公務員にも求められています。

津:錦戸君はどう?あと三年あるから、今のうちに期待することとかあれば言っておいた方が良いよ(笑)。

錦:そうですね。地域活動や地域振興は現在人吉や玉名など郡部が中心ですが、中心市街地活性化の地域活動についても興味があります。そういうフィールドワークの幅が広がることを期待します。

今:総管で大きく成長していく自分に期待している、という抱負ですね。

一同:(笑い)

津:総合管理学部も20年を迎え、我々も更なる変化を目指していきます。今後の総管にご期待ください。本日はお忙しいところ有り難うございました。

共学化・総合管理学部設立20周年記念シンポジウム

「これから求められる大学～グローカル時代の大学教育～」

古賀学長

平成26年11月8日（土）、共学化・総合管理学部設立20周年を記念してシンポジウム「これから求められる大学～グローカル時代の大学教育～」が開催され、本学教職員・学生のほか、高校生を含む一般の方など約130名が参加しました。

開会にあたり、古賀学長から「総合管理学部設立20年が経過し、学部設立当初の卒業生は、社会の中堅として活躍している。10年後には熊本の地域経済のキーパーソンとして活躍してくれることを期待している」とのあいさつがありました。

基調講演では、潮谷氏から、「共学化・総合管理学部設立20周年を迎え、これからの20年を考えるにあたって、熊本県立大学は、何を変えてはいけないのか、何を変えなければいけないのか、について考えることがスタートラインである」と語り、今日の大学教育では、『積極的に社会を支えていく資質』が大切であること。多様な地域の人材を育て、地域と連携していくことが必要であること。また、今後、時代、社会又は様々な領域の中で起こる変化に目を向けて、「県立大ならではの地域性豊かな大学として発展していってほしい」との提言がありました。

潮谷義子氏

続いて、4人のパネリストの意見発表後、パネルディスカッションが行われました。足立氏からは、「自分の意思を相手に伝えるプレゼンテーション能力を磨いていくことが必要である」、藤井氏からは、「若者の男女共同参画に対する意識は変わってきた。学生のうちに、社会と繋がることを意識して行動してほしい」、花田氏からは、「学生には、教養を高めることを積極的に求めていってほしい」、高埜教授は、「県立大生の潜在的能力は実は高いのに努力が足りない。早く自分の目標、将来を思い描き、それに向かって自分が何を学んでいくべきかを見つけ努力してほしい」とそれぞれの立場でのご意見をいただきました。

足立國功氏

藤井宥貴子氏

高埜教授

花田大作氏

最後に、コーディネーターである石橋教授からは、本学の今後のあり方について、公立大学だからこそ、「地域化」、「国際化」の推進ができるとしつつも、総合管理学部が独自性と意義を明確化し、学生により高い能力を身につけさせ、教員個々人が能力を発揮して研究・教育ができる環境づくりを行うべきだ、とまとめがあり、閉会しました。

石橋教授

開催概要

開催期日：平成26年11月8日(土)
午後2時～午後4時30分
場　　所：中講義室3

■ 基調講演
「グローカル時代の学問」
講師：潮谷 義子氏(本学客員教授、日本社会事業大学理事長)

■ パネルディスカッション
「グローカル時代の大学教育に求められるもの」

＜パネリスト＞
・足立 國功氏(熊本ソフトウェア株式会社社長・熊本県工業連合会会長)
・藤井 宥貴子氏（熊本市男女共同参画センターはあもにい館長）
・花田 大作氏(本学卒業生・文部科学省高等教育局大学振興課公立大学係長)
・高埜 健(総合管理学部教授)

＜コーディネーター＞
・石橋 敏郎(総合管理学部教授)

―活躍する卒業生―

熊本県立大学　COC推進室　特任准教授 **野口 慎吾**（のぐち しんご）

特定非営利活動法人 地球緑化の会 海外事業専門家（2009年～）。
1998年 熊本県立大学総合管理学部総合管理学科(経済研究室)卒業（1期生）。
2010年 熊本県立大学環境共生学研究科（農村空間システム学）農村計画学研究室 博士後期課程修了。
2011年 博士（環境共生学）取得。
2014年 10月より現職。

◆ 現在

文部科学省が実施する「地（知）の拠点（Center of Community、略称COC）」事業の推進のため2014年10月末より本学のCOC推進室に赴任し、早3ヵ月が過ぎました。この間、松添推進室長、中宮特任教授、地域連携・研究推進センターの皆様に支えられながら、八代市を始め天草市、和水町、五木村、相良村、熊本県等の連携自治体や共同事業を実施する熊本大学との協議や打合せに加え、これらの地域を対象にした地域志向教育研究を行う先生方に助言をいただきました。今後は、本学のモットーである「地域に生き、世界に伸びる」グローカルな視点に立ち行動できる学生が増えることを期待しつつ、学生の皆さんを教育面、先生方を研究面、自治体・企業の皆さんを地域貢献の面でサポートし得る体制を全身全霊で整えて参ります。この場をお借りして、本事業に対し、ご支援・ご協力いただいている関係者の皆様に感謝申し上げます。

先日、某自治体と県内の金融機関のトップの方々から「県立大生は、おとなしい」と言われました。このことは、県内の企業や自治体の方々からもよく耳にします。ちなみに「おとなしい」とは、weblioによると〔「おとな（大人）」の形容詞化で、①性格が穏やかで素直だ。落ち着いて静かだ。②派手でなく落ち着いていて好ましい。③大人である。年長である。④大人っぽい。大人びている。〕とあります。全体的に良い意味で定義されていますが、会話で使用される際は、むしろマイナスなイメージが先行してしまうようです。果たして、県立大生は、おとなしいのでしょうか？

◆ 過去

今から約20年前の学生時代と卒業後に滞在したアフリカ生活8年間から私が学んだことは「成せば成る、成さねば成らぬ何事も」、スワヒリ語の諺「山と山は出会わないが、人と人は出会うことができる」です。

総合管理学部の入試面接官の先生から、男子学生には大いにわんぱくな活動を期待するとの使命を受け、サッカー、バレーボール、ソフトボール、ビーチタッチフット、新聞部（今は無き）、白亜祭実行委員、マンドリン部などに所属し、今のアリーナや環境共生学部新棟の場所がグラウンドでしたので、そこで夕方遅くまで練習していたことを思い出します。また部活の先輩からは「良いことも、悪いことも何でも取り組みなさい」と叱咤激励を受けました。当時は、その意味が分かりませんでしたが、今になって思うと「あの時やっときゃ、よかったなー」＝「時すでに遅し」、「思い立ったが吉日」＝「成功への第1歩」。入学当時、上3学年は全て女性のお姉さま方で、最初の男子学生であったため、県立大学生は「おとなしく」なってしまったのかもしれません。このことは1期生の我々にも少しは責任があると思っています。しかしながら、学業を基本に多くの部活やサークルに所属し、たくさんの人に出会うことができたおかげで、先生方を始め先輩後輩と色々な面でも人脈にも恵まれ、今に至っています。まさにヒューマンネットワーク、県立大学の繋がりです。

◆ 未来　これからの20年

これまで本学が実施してきた教育を基本とする様々な研究や地域貢献、国際交流も含めると、実に多種多様な取り組みがなされてきていることに敬服すると共に、歴史の重みを痛感致します。まさに「温故知新」として、これらの知見を再構築し、組み合わせることで新たな未来が築かれていく予感がしています。失われた20年ではなく、私にとっては今後の20年を見通すための培われた20年と考え、COC事業で実施するフューチャーセンターや地域志向教育研究（地域貢献を志向した教育と研究）を中心に、学生と先生方、更には地域の要望に応えるべく、アツく、ゆるく、しなやかに対応していきたいと思っております。ビビっときたらグローカルセンター1FのCOC推進室へ、お気軽にお越し下さい。

最後になりますが、在校生にエールを。「Boys be wonderful!　県大生よ、わんぱく、かつ、ワンダフルになれ!!」

国際交流 INTER

JENESYSの研修団（インド・韓国）来学

インドから来学した中高生

韓国から来学した大学生

JENESYS 2.0（日本とアジア大洋州諸国及び地域との間で行われる青少年交流事業）の一環として、平成26年10月17日（金）にインドから23名の中高生が、平成27年1月20日（火）には韓国から34名の大学生が本学を訪問しました。本学の多くの学生がキャンパスツアーや日本語・日本文化に関するディスカッションに参加し、交流を通して国際的視野を広げる経験ができました。

東南アジア青年の船の学生と交流しました

創設以来41回を数える日本有数の国際交流事業である「東南アジア青年の船」（内閣府主催）の参加者30名が平成26年11月1日（土）に来学しました。

この「日本ASEAN青年交流」プログラムでは、歌あり踊りありでの各国紹介と英語でのグループ・ディスカッション。日本と東南アジアの将来のために様々なアイディアを出しあいました。実は過去に県大からも3人の参加者が出ています。興味のある方は、内閣府のHPをご覧ください。（http://www.cao.go.jp/koryu/）

ソウル大学日本研究所の学生に対する特別講義

平成27年1月27日（火）、28日（水）の2日間、ソウル大学日本研究所からパク・チョルヒ同研究所長をはじめ、10名の大学院生が本学を訪問し、本学教員による特別講義が下記のとおり行われました。

- 「日本の政治・外交」（講師：五百旗頭 真理事長）
- 「少子高齢化・過疎化から地域再生へ～『持続可能な発展』と熊本・九州経済～」（講師：中宮 光隆地域連携・研究推進センター特任教授）
- 「日本の公害の歴史と公害克服の要因」（講師：篠原 亮太地域連携・研究推進センター特任教授）
- 「日本文学の近代化と反近代の源泉」（講師：半藤 英明文学部日本語日本文学科教授）

NATIONAL EXCHANGE

祥明大學校からの交換留学生が1年間の留学生活を終えました!

【文学部日本語日本文学科　特別聴講生　尹基寛（ユン・ギグァン）】

昨年の3月、不安と期待を持って到着した熊本でしたが、今は韓国に帰る日がだんだん近づき、とても寂しく感じています。色々なことに慣れたと思ったら、もうお別れかと思うぐらい、あっという間に熊本県立大学での1年間の交換留学生生活が過ぎました。

大学で出会った皆さんの優しさのおかげで、本当に楽しい1年となりました。私の拙い日本語を最後まできちんと聞いてくださった皆さんや、毎日楽しいハプニングが起こる日本語教育研究室、学生GPの際に、皆さんと一緒に頑張った会議や活動、大変だったけど児童の心に触れることができた黒髪小学校での教育実習など、楽しくて、忘れられない思い出がいっぱい出来ました。

大学生活以外にも楽しい経験はたくさんありました。ピンクに染まった熊本城での花見会や楽しく踊った火の国祭り、すばらしい花火大会や国際交流会館での世界の大喜利、長崎のハウステンボスや大分の湯布院への旅行など、短い間でもいろんな経験が出来ました。

1年間本当にお世話になりました。韓国に戻ってもこの思い出を大事にして、日本語の勉強や生活を頑張ります。

【文学部日本語日本文学科　特別聴講生　柳基準（ユ・ギジュン）】

熊本県立大学での交換留学は、とても充実した楽しい経験でした。

学習面では、日本語教育研究室において、専攻の日本語と日本語学について詳しく、かつ専門的な学習ができたと思います。特に、日本語教育の実習では、韓国の大学では味わえない、特別で有益な経験で、留学生活の中で一番の思い出になりました。

生活面では、日本語教育研究室の馬場先生のご指導と、学生たちの助けのおかげで、これといったトラブルのない留学生活ができました。また、国際クラブの学生や留学生仲間との交流もとても楽しく、国際的な感覚と知識を高めるいい機会となりました。

1年間の交換留学があっという間に過ぎましたが、熊本での生活や県立大学での学習経験は、絶対忘れません。また面倒をみてくださった皆さんに感謝します。ありがとうございました!

【文学部日本語日本文学科　特別聴講生　朴眞實（パク・ジンシル）】

熊本県立大学に来て1年、あっと言う間に時間が過ぎ、帰って行く日がやって来ました。

慣れない生活を送る中で、何も知らないまま国際交流会館での催し物に参加したりしながら学校が始まることだけを待っていた日が、まるで昨日のように感じられます。最初はとても緊張していましたが、国際クラブや馬場研など、いろんな人々と出会えることができました。その中でも、日本語教育実習というものを通じて、日本に住んでいる外国の子供たちに日本語を教えるという新しい経験は、子供たちとの出会いだけでなく、色んなものを考えさせられましたし、私自身も専門である日本語をしっかり学ぶことができました。韓国では考えられなかった日本語の深さを知り、やはり日本語は難しいな、と思いながら勉強をしました。熊本での留学生活は、とても楽しく新しい経験をすることができた良い機会でした。

リスニングテストはリスニング能力を測定しているのか？　言語テストの妥当性検証

文学部　英語英米文学科
准教授　飯村 英樹
（Hideki　IIMURA）

Profile

筑波大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程修了。博士（言語学）。茨城県私立高校教諭、常磐大学国際学部教授を経て、2014年より現職。

はじめに

日本人英語学習者はリスニングが苦手だと言われています。リスニングを困難にしている要因を検証し、効果的なリスニングの指導法を明らかにすべく、高校教員時代から研究を続けています。指導の効果はテストを実施し、綿密に分析することによって知ることができます。また学習者はテスト結果から自分の長所・弱点を知り、学習するべき内容を気づくことができます。したがって、どのようなテストを用いるかは、教師と学習者の両方にとって，とても重要なポイントとなります。本稿では、私が現在、研究している多肢選択式リスニングテストについてご紹介いたします。

選択肢は4つが妥当か？

英語のリスニングテストにおける選択肢の数はなぜ4つなのか。多肢選択式テストは採点の容易さや信頼性の高さから、英検やTOEIC、TOEFLなど国内外の主要なテストで採用されています。多肢選択式テストは複数の選択肢の中から正答を選ぶもので、多くの場合、1つの正答に3つの誤答（錯乱肢）から構成される4択問題になっています。しかし、4択が他の選択肢数（3択など）に比べて優れているという明確な根拠はありません。

選択肢の数の研究は、実は100年以上の歴史がありますが、その多くが医学系や社会科学系のテストで占められており、言語テストの分野ではほとんど検証されていません。そこで、選択肢の数の違いがテストの精度や難易度、受験者の心理にどのような影響を与えるかを明らかにすることで、最適な選択肢数を提案したいと考えています。

リスニングテストにおける文字の役割

選択肢の数に加えて、リスニングテストでは選択肢の提示方法も大きな問題です。ほとんどのリスニングテストでは、選択肢は問題冊子に印刷されています。つまりリスニングテストは受験者に選択肢（多くの場合、質問文も）を読ませていることになります。リスニングのテストですから、選択肢も（質問文も）文字ではなく音声で提示すべきだと考えています。しかしながら、本文と質問文に加え、4つの選択肢も音声で聞くという作業は、受験者にとってかなりの負担となるかもしれません。そこで選択肢の数を減らして、音声で提示するという新しいタイプのリスニングテストの可能性を探っています。

錯乱肢の魅力度？!？

テスト理論では、多肢選択肢式における誤答のことを錯乱肢（distractor）とよびます。文字通り、受験者を惑わせる（distract）役割を果たすためこのような名前がつけられています。錯乱肢は、『正解のように思えるが、明らかに間違いでなければならない』という厳しい制約が課せられています。そのため、錯乱肢の作成は非常に困難です。これまでの研究では、3つの錯乱肢がある4択問題でも受験者が選ぶ錯乱肢は1つ、多くても2つと言われています。受験者に選ばれる錯乱肢と選ばれない錯乱肢の違いは何か？受験者にとって魅力的な錯乱肢とはどのようなものかを解明することにより、より妥当性の高いテストが作成できると考えています。

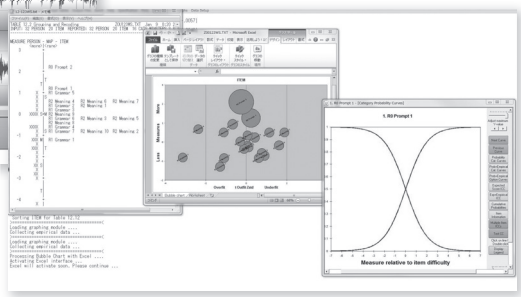
研究の道具

① 音声編集ソフト(画像1)
リスニングテストを作成するには、音声を取り込んで編集するソフトが必要になります。一見、複雑そうですが、ワープロ感覚で音声を切り貼りできます。

② データ分析ソフト(画像2)
テストを実施したら、そのデータを分析するソフトが必要になります。この画像は、ラッシュモデル(項目応答理論)による分析結果です。複雑な統計処理に基づく分析であっても、できるだけ分かりやすく図示化できるよう心掛けています。

③ ホームページ
研究成果をできるだけホームページで公開したいと考えています。まだまだ未完成ですが、少しずつ内容を充実させていきます。
タイトル『雨のち晴れの英語教育』
(http://www.iimurahideki.sakura.ne.jp/)

画像1



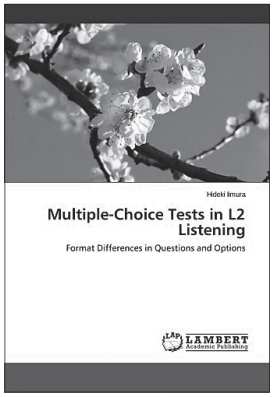
画像2

ホームページ

著書紹介

タイトル:教育・心理系研究のための データ分析入門
理論と実践から学ぶSPSS活用法
編者:平井明代(編)　　出版社:東京図書
ISBN:4489021283　　発行年:2012年

コメント
第1章「測定と評価:妥当性と信頼性」を編者である筑波大学教授・平井明代先生と担当させていただきました。



タイトル:Multiple-Choice Tests in L2 Listening:
Format Differences in Questions and Options
Hideki IIMURA(単著)
出版社:Lambert Academic Publishing
ISBN:3659462861　　発行年:2013年

コメント
2012年3月に筑波大学に提出した博士論文がもとになっています。多肢選択式リスニングテストの質問文と選択肢の提示様式について検証しています。

文学部フォーラム「それでも天は転る－熊本におけるもう1つの近代」を開催!!

文学部では、春名徹氏（作家・歴史研究者）と旭堂南海師（講談師）をお招きのうえ、標記のフォーラムを開催しました。基調講演では、春名徹氏が熊本正泉寺の僧侶・佐田介石についての最新の研究成果や歴史的背景を踏まえながら、「奇人」と捉えられがちであった従来の人物像を打ち破る、新たな評価や今後の見取図が提示され、パネルディスカッションでは、春名氏、半藤英明学術情報メディアセンター長、平岡隆二准教授、大島明秀准教授が「西洋化ではない、もう1つの近代」を討論し、最後に旭堂南海師による佐田介石を題材とした新作講談「『講談・佐田介石物語』―時代遅れと笑えるか？―」が行われました。

○開催日時：平成26年11月22日（土）午後1時～5時
○開催場所：中ホール
○対象、来場者数：学生、一般から約180名

フューチャーセッション「プロムナードカフェ」を開催しました。

平成26年11月29日（土）、文部科学省「地（知）の拠点整備（大学COC）事業」のキックオフイベントとして、多様なステークホルダーが対話を通じて「熊本の未来」を描くフューチャーセッションを開催しました。今回は熊本では未だ馴染みのない「フューチャーセッション」のオープン性を体感してもらうため、「プロムナードカフェ」と題し、銀杏が色づく県庁プロムナードで開催しました。

「30年後に残したい熊本の未来を考える」というテーマで、（株）フューチャーセッションズ代表・野村恭彦氏と芝池玲奈氏のファシリテーションのもと、自治体職員や学生、企業関係者等約100名がセッションに参加しました。

本学と長崎大学、福岡工業大学の3大学が環境分野における包括連携協定を締結

平成26年12月4日（木）、長崎大学において、標記3大学の環境分野における包括連携協定の締結調印式が行われました。

そして、この協定締結後初の取り組みとして、平成27年2月21日に本学大ホールで「環境共生フォーラム」を開催。名古屋大学名誉教授 岩坂泰信氏の基調講演の後、3大学の学部長等が環境の教育・研究、連携についてパネルディスカッションで討論を行いました。併せて、3大学の研究者によるポスター発表が行われ、交流を深めました。

熊本県工業連合会と包括協定を締結

平成26年12月16日（火）、熊本県立大学と一般社団法人熊本県工業連合会とは、様々な分野での相互協力を目的とする包括協定を締結しました。

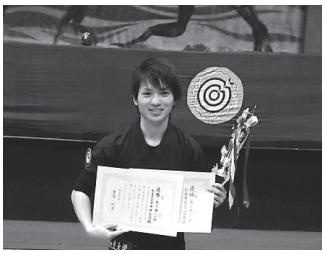
五百旗頭理事長は、「食や健康科学分野などの分野で地域のものづくり産業に貢献したい」と語り、足立会長から、「アグリバイオフーズ、予防医療等での連携に期待している」と挨拶がありました。この協定により、本学が有するシーズを活用した様々な共同研究や共同開発、人材育成等が期待されます。

防災拠点対応型 太陽光発電システム供用開始式

平成27年1月5日(月)、本部棟1階ロビーにおいて太陽光発電の供用開始式が行われました。

このたび、本部棟に20kW、講義棟1号館に50kWの太陽光発電設備を設置、既設の30kWと併せて計100kWの発電能力を有し、学内の電力として消費するとともに、併設した蓄電池により災害等の停電時にも電力を確保し、地域の防災拠点としての役割を担います。

第50回九州学生弓道新人戦 男子個人戦優勝!



平成26年12月7日(日)に開催された第50回九州学生弓道新人戦指宿大会の男子個人戦で、本学総合管理学部1年平井文浩さんが優勝しました。

平井さんは高校弓道では熊本県で準優勝し、九州大会と全国大会に出場した経験がありましたが、優勝は1度もなかったそうです。今回の九州大会で優勝でき、初めて試合で嬉し涙を流すことができたと話してくれました。今後のさらなる活躍が期待されます。

マシンが充実したトレーニングルームを開設

4月1日(水)から旧売店のあったスペース(キャリアセンター内)にトレーニングルームが開設されます。エアロバイク、ダンベル、バーベルのほか、体の各部位を鍛えるマシンがあります。

授業等での活用のほか、平日の午後6時から9時まで、学生・教職員に開放しておりますので、皆さんのご利用をお待ちしております。

後援会便り

後援会とは

●本学学生の保護者又はこれに準ずる方を会員として組織されています。
●大学の教育事業を後援し、大学と家庭及び社会との協力によって、大学教育の成果を上げることを目的としています。

空撮カメラを使い撮影している様子

後援会では教育研究推進事業として共同自主研究にかかる経費を助成しています。平成26年度の研究の一つに田中グループが行う「ドキュメンタリー映像作成における新たな撮影手法の応用と確立に関する研究」(左写真)があります。

このグループは、新しい技術を活用した映像作りを研究するため、近年、一般の人でも手に入れられるようになった空撮カメラ(ラジコンヘリ)を用い、空中からの撮影に挑んでいます。

研究に参加した学生からは、「大変なことも多いがやり遂げた達成感が大きい」との言葉も多くあります。授業の中だけでは味わえないものを得るため、もっと多くの方にも是非チャレンジしてみて欲しいと思います。

後援会の事業

次の4つの事業を中心に学生の活動全般を支援しています。

《就職対策事業》
●就職対策講座(公務員試験対策講座、就職活動実践講座、ITパスポート試験対策講座、二級建築士受験対策講座、秘書技能検定対策講座等)受講料の助成又は開催経費の助成
●PROGテスト(社会人基礎力の測定)の実施支援、TOEIC®IPテスト開催の支援及び受検料の助成、各学部による就職支援事業開催経費の助成、資格取得者への助成　等

《教育研究推進事業》
●共同自主研究への助成
●インターゼミナール大会等への参加助成　等

《国際交流推進事業》
●海外留学・研修期間に応じて渡航経費等の助成
●留学対策講座の受講料の助成
●英語合宿開催経費の助成　等

《学生活動支援事業》
●各サークルの活動費・白亜祭開催経費・全国大会出場経費等の助成
●学生用コピー機の設置、コピーカード販売
●学生のリクエストに応じ図書を購入し図書館へ配置
●防犯対策用ブザーの無料貸出し　等

※新入生へは、本学合格通知の際に、後援会の説明及び入会・会費納入のお願いをしております。
まだ未加入の方は、充実した学生生活を送るためにも後援会事業をご理解いただき、是非ご加入ください。途中年次であっても随時入会を受け付けています。

活き活き元気種(だね)!

このコーナーでは、サークル活動をはじめ、
地域で活躍する熊本県立大生の声をお届けします。

全国公立大学学生大会で『がまだせ、わさもん!From熊本』の発表!!

大会の様子

平成26年10月11日(土)-12日(日)にかけて兵庫県立大学をメイン会場に開催された全国公立大学学生大会に本学学生が参加しました。

この大会は公立大学学長会議に併せて開催されたもので、今年で2回目を迎えました。

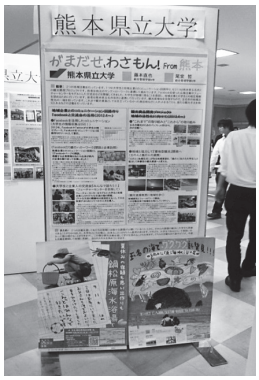
32校の公立大学、102名の学生と教職員が参加した今年度の大会テーマは「大学・地域における学生・教員・職員の理想的な協働を考える」でした。

大会では参加した学生や大学が行っている地域貢献活動や地域に根差した研究活動の紹介、地域で活躍する方々の基調講演とパネルディスカッション、全国の公立大学の学長も交えての情報交換会、グループワークによる学生と教職員の協働による地域貢献の提言などが行われました。

本学からは、藤本直也さん(総合管理学部4年)、尾堂哲さん(総合管理学部3年)の2名が参加し、「がまだせ、わさもん!From熊本」のタイトルでポスターセッションを行いました。

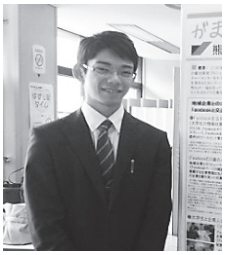
台風19号接近で開催が危ぶまれましたが、何事もなく無事大成功で幕を閉じました。

全国の方々との交流、学生大会の成功で、これからグローカルな人材として飛躍すべく大きな収穫があったことでしょう。



ポスターセッション

参加した学生のコメント


総合管理学部4年
藤本 直也

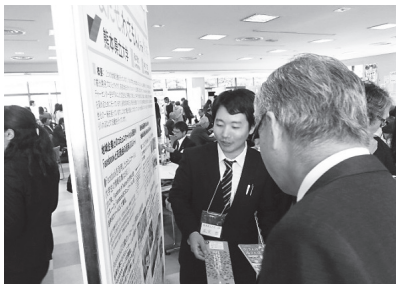
全国の公立大学の学生がどの様な地域貢献や研究活動を行っているかを知る機会は殆どないため、今回この大会に参加したことは見識を広めるうえでとても有意義なものでした。また、大会当日の前夜は各々の活動を紹介し合い、それについて議論し、地域が抱えている課題や私たち大学生に何が出来るのか、さらにはそれぞれの地元で自分たちが作り上げたい理想の地域像について夜遅くまで語り合いました。

大会に参加したことで、地域や地方をどうにかしなければと感じている仲間が大勢いることを知り、活動意欲も高まりました。また、全国の公立大学の学生が行っている活動を参考にしながら、熊本県立大学のクオリティーや特色を向上させることも大切だと思いました。

総合管理学部3年 **尾堂 哲**

普段は自分の近くの学生としか接する機会がないため、全国公立大学学生大会で様々な地域の学生と交流する機会を頂けたことは、自分にとって貴重な経験となりました。どの学生も自分の行っている活動に自信を持っており、堂々と発表していた姿が非常に印象に残っています。また宿泊施設の談話室では、それぞれの地元が抱えている課題について、出身地を超えて共に議論することもありました。

今回の経験で学んだことは、今後の地域と連携して行う活動に活かしていきたいと思います。


古賀学長に説明する尾堂さん

熊本県立大学未来基金へのご協力に、心よりお礼申し上げます。

熊本県立大学未来基金
皆様からのご協力、ご支援をお願い申し上げます。

平成26年奨学生決定通知書交付式

熊本県立大学未来基金につきましては、平成26年9月1日から12月31日までの間に、下記のとおり、延べ個人9名、2法人・団体等の皆様から総額28,095,000円のご寄附をいただき、これにより平成21年9月の設立以来の基金総額は、125,352,255円（申し出分を含む）となりました。

平成26年度は、西部電気工業奨学金に4名、同窓会紫苑会奨学金に8名の計12名を奨学生として決定し、11月10日に交付式を行いました。また、本年度は新たに、学生交流協定等に基づいて留学する学生への「短期派遣留学生支援奨学金制度」を創設し、1名の奨学生を決定いたしました。

今後とも、奨学金その他、教育研究活動の充実に資する活用を図って参りたいと思いますので、熊本県立大学未来基金へのご協力、ご支援をお願い申し上げます。

ご寄附をいただきました皆様に感謝し、ここにご芳名を掲載させていただきます。

1. ご寄附してくださった方 （寄附金額別、五十音順、敬称略にて掲載させていただきます。）

【個　人】
1000万円　浅野 敦子
1000万円　故小辻 梅子名誉教授ご遺族
50万円　武藤 徳子

【法人・団体等】
200万円　熊本県立大学同窓会紫苑会
平成22年4月お申し出の奨学金（平成26年度分）として
500万円　西部電気工業株式会社
平成22年1月お申し出の奨学金（平成26年度分）として

2. お名前のみ掲載を希望された方 （五十音順、敬称略にて掲載させていただきます。）

【個　人】　黒木 誉之　　山神 美代子　　山口 郁代

※お名前・寄附金額の掲載を希望されなかった方　個人3名

人事情報

採用（平成27年4月1日付）

[文学部]
英語英米文学科　講　師　ブアリブ アラン

[環境共生学部]
環境資源学科　准教授　阿草 哲郎
環境資源学科　准教授　モロー ジェフリー スチュワート
居住環境学科　准教授　佐藤 哲

[総合管理学部]
総合管理学科　情報管理コース　講師　石橋 賢

退職（平成27年3月31日付）

[環境共生学部]
環境資源学科　教　授　メルトン サード ジャン ビューレン
居住環境学科　准教授　細井 昭憲

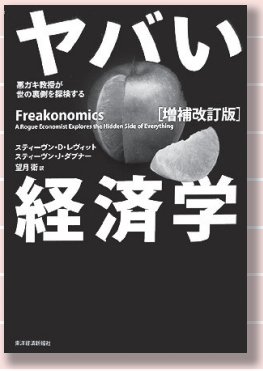
[総合管理学部]
総合管理学科　地域・福祉ネットワークコース
教　授　永尾 孝雄

昇任（平成27年4月1日付）

環境共生学部　教　授　井上 昭夫
環境共生学部　教　授　辻原 万規彦
環境共生学部　准教授　友寄 博子
環境共生学部　准教授　小林 淳
環境共生学部　講　師　小森田 智大

おすすめの1冊

「ヤバい経済学」



著者／スティーヴン・D・レヴィット
スティーヴン・J・ダブナー（著）
望月衛（翻訳）

経済学というと、景気の話や金儲けに関係した話ばかりの学問だと思っている人が多いかもしれません。しかし、そのような話が経済学のすべてではなく、経済学は様々な人間の活動を対象とする非常に適用範囲の広い学問です。実際『ヤバい経済学』には、例えば、大相撲で八百長は行われているのかといった、一見経済学とは結び付かないような話が数多く出てきます。

経済学では個人、企業、政府などの経済主体のインセンティブ（誘因）を考えることで、それぞれの行動を理解しようとします。本書では様々な事象のデータを集め、それを登場する経済主体のインセンティブに注目しながら分析することで、その背後にある仕組みを理解しようとしています。大相撲の八百長の話でも、力士のインセンティブに注目しながら過去の取り組みのデータを分析することで、八百長の有無に迫っています。

本書によって、経済学の幅広さやその思考方法に触れてもらえたらと思います。

総合管理学部講師　**河西 卓弥**

熊本県立大学
アーカイブズ

熊本県立大学の貴重資料等を紹介します

渋江松石『菊池風土記』写本三冊

渋江松石『菊池風土記』。寛政六年（一七九四）頃の成立。武藤巌男・宇野東風・古城貞吉、三氏の編纂になる「肥後文献叢書」に収録され、菊池地方の地誌（地理・伝説など土地にかかわる情報を集めた書物）として知られてきた。だが本学蔵の『菊池風土記』は、伝来がすこぶるユニーク。

本書を写した中嶋真親は、隈府町の商人で江戸後期の人。文化元年（一八〇四）から文久二年（一八六二）の記録『見聞録』を残した地元の名士。しかも本書は、明治二十六年に北白川能久親王に献上されたとのいわく付き。

解説：文学部教授　鈴木　元

「春秋彩」へのご意見・ご感想をお待ちしています。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
いただいたご意見は、今後の広報紙編集の参考にさせていただきます。
〒862-8502（住所記載不要）
熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行
FAX 096-384-6765　E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行：熊本県立大学
〒862-8502 熊本市東区月出3丁目1番100号
TEL 096(383)2929(代)
http://www.pu-kumamoto.ac.jp/

再生紙を使用しています